



▲古今和歌集 卷第十五 恋五 (臨書)

古今和歌集仮名序を保育者が読みました

評者

室田一樹
(保育園園長)

詠む、歌う

beauty and harmony

歌詞 吉田美和 (一九九五年)

ホースの中 水が暴れる 青い 夏の庭の蛇

下弦の月 目の高さで光る オリオン座

鶏頭の赤

向日葵の黄色

海に洗われた 小石

この世界の美しさを

ずっと あなたと 見られますように

最後の二行に書かれた「この世界の美しさ」を見られなくなるのはどのような時なのだろうと思うと、切なくなります。それは二人が別れた時なのでしょうか。どちらかがこの世を去った時なのでしょうか。それとも、この世界の美しさを人類が破壊してしまった時なのでしょうか。吉田美和さんがアカペラで

歌うこの曲を聴くたびに私は、この世界の美しさを一緒に見続ける人と出会うことと、この世界の美しさがいつまでも壊れずにあることが、人の幸福ではないかと思うのです。

この世界に負けず劣らず、芸術も美しいものです。中でも私は歌が好きです。美しいものを歌にする。人の思いや気持ちや自然に託して歌う。それは万葉の昔から変わらず今日に続いていて、吉田美和も優れた詠み手であり歌い手です。千百年以上もの昔、その歌の素晴らしさを歌人紀貫之は、古今和歌集仮名序に次のように書き記しました。

倭歌は、人の心を種として、よろづの言の葉となれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に、思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出だせるなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をもいれずして、天地を動かさし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をもや

はらげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。

(やまとうたと申しますものは、人の心を種にたとえますと、それから生じて口に出た無数の葉のようなものであります。この世に暮らしている人々は公私さまざまの事にたえず応接しておりますので、その見たこと聞いたことに託して心に思っていることを言い表したものが歌であります。花間にさえざる鶯、清流に住む河鹿かじかの声を聞いてください。自然の間に生を営むものにして、どれが歌を詠まないと申せましょうか。力ひとついれないで天地の神々の心を動かし、目に見えないあの世の人の靈魂を感激させ、男女の間に親密の度を加え、いかつい武人の心さえもなごやかにするのが歌なのであります。)

保育の場で、歌ったり、踊ったり、描いたり、作ったりといったことが多いのは、それが身体を使って自分の気持ちや思い(感動と言ってもいいでしょう)を表現するメディアだからではないでしょうか。中でも子どもたちは歌うことが好きなようです。砂でプリンを作っている、積み木でバスを組み立て

ていても、もちろん絵筆を持つ時も、歌が口をついて出てきます。でたらめ歌であったり、場面に合わせてつくったモチーフの繰り返しであったり、先生から教わった歌であったりいろいろですが、歌のリズムに合わせると調子が出るのでしょうか。気持ちいいのでしょうか。その気になれるのでしょうか。紀貫之は「生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」と喝破していますから、子どもたちが身体を動かす時に歌を口ずさむのは、至極当たり前のことなのかもしれません。それから思うと、保育の場で歌が指導されるということになると途端に窮屈になります。歌唱指導も大事なのでしょうが、保育者が歌っていると子どもがいつの間にか覚えて歌ってくれて、*そ*ういえば散歩の帰り道、手をつないで一緒に歌ったね、楽しかったね」と話せるような保育の場の歌のほうが、素敵です。

生きとし生けるもの

「自然の間に生を営むもの」は皆、歌を詠むという

紀貫之の自然観は、やはり日本の四季の細やかな移ろいが生んだ自然の多様性に由来するのでしょうか。環境問題が教示したことの一つに人間中心主義からの脱却があると私は思っていますが、土や水や空気を汚染して初めて気付いたことを、紀貫之はとつくの昔にわかっていました。理科教育では、自然を対象化して観察し、栽培したり、飼育したりして理解しようとしています。そこには自然を資源として利用しようとする欲が垣間見えます。これでいいのでしょうか。

保育園の庭に原っぱを用意して、百本の木を植えて、小川を通してみました。そうしてできた風景の中に子どもたちが溶け込んでいます。虫かごに入れたカブトムシや水槽のカメではなく、草陰から飛び出すトノサマバッタや葉の上をゆっくり進むテントウムシに、子どもたちは目を輝かせています。そうして子どもたちはヒト以外の生き物の中に身を置く心地よさと、自然とひとつながりになる安心感を確認しているように思えます。環境教育とはこうした

ことを言うのではないでしょうか。

業平が見た月を美和も見る

歌を一つ覚えると、その歌の世界が自分のものになります。歌いだせば、いま・ここの自分が歌に描かれた時間と場所に行つて、もう一人の自分を生きることが出来ます。そして再び、いまのここへ帰ってきます（帰つてこなかつたら大変です）。

冒頭に引用した吉田美和の歌には、この世界の美しさの一つに下弦の月が取り上げられています。古今和歌集にも月は頻出します。数えたわけではないのですが秋の歌や恋の歌に多いような気がします。古今和歌集巻第十五恋歌五から一首取り上げて、月を見る未練がましい男の世界へ出かけてみましょう。

五条后宮の西の対に住みける人に、本意にはあらでもの言ひわたりけるを、正月の十日余りになむ、ほかへ隠れにける。在り所は聞きけれど、えものも言はで、又の年の春、梅の花の盛りに、月のおもし

ろかりける夜、去年を恋ひてかの西の対にいきて、月の傾くまであばらなる板敷に臥せりてよめる。

在原業平朝臣

（五条后の御所の西の対屋に住んでいた女性と、公然とはなく交際を続けていたがどうしたことが一月の十日過ぎに、よそに隠れてしまった。彼女の居所は聞いていたが、文通さえもすることができないでいた。翌年の春のこと、梅の花が盛りで、月が感興をそそつた夜、去年のことを恋慕い、あの西の対に行つて、月が西に傾くまで開け放たれた板敷きの間に臥せつたあげくに詠んだ歌）

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして

（月よ、お前は去年の月と違うのか。春よ、お前は去年の春ではないのかね。かくいう私の身体はたしかにもとのままの体なのだが。）

「月のおもしろかりける夜」と在原業平が詞書に記したと同様に、吉田美和も下弦の月に「感興をそそ

られた」経験があるのでしよう。在原業平が見た月と同じ月を吉田美和も見たとすると、何だかうれしい気持ちになります。確かに月はこの世界の美しさの一つであり、確かにずっと一緒に見ていてくれる人が欲しくなります。

ところで、子どもは大好きな人のすることを取り込んで育っていきますが、それはおそらく、大好きな人に自分になりたいので大好きな人のすることをまねて学ぼうとするのではないのでしょうか。そうだとすれば、保育者は子どもからこの世界の美しさを一緒に見ていたいと思われなければなりません。この世界の美しさと、この世界の美しさを写し取った芸術をよく知る人でなければなりません。人が良いとするからとか、学校へ上がると習うからとか、そんなことからではなく、自身が美しいと思う歌を歌いだすのでなければなりません。歌うという経験の共有は、必ず、一緒に楽しいという情動の共有を伴わなければならないのですから。

おわりに

紀貫之が言うように、歌が人の心を種として育ち茂った葉のようなものであるなら、目に見える子どももの振る舞いもまた、目に見えない子どももの心がそうさせるのだと言えます。子どもの心が育ってほしいと願うなら、子どもの思いや気持ちを自分の思いや気持ちにおいて感じ取る保育者が子どもの傍らに在ることは大切なことです。そのようにして自分のことを保育者がわかってくれるので、子どもはその人を好きになるのです。こうして大好きになった人を取り込んで子どもが育つ場が、保育の場です。

吉田美和の歌詞に向日葵があったので、厚顔を顧みず、私が岩屋保育園の子どもたちのために作った歌「ひまわり」を引用します。

早くねっていったのにおむかえはまだ
終わらないお仕事がきつとあるのね

私にも如雨露をちようだい

手伝うわ せんせい

木漏れ日が揺れる園庭に

育て育て ひまわり

ママが呼ぶ声がする玄関のほう

ごめんねって抱きとめて笑ってくれた

さようならせんせい ばいばい

明日また遊ぼう

夕やみがせまる園庭に

ひとり咲いて ひまわり

古今集の詞書ではありませんが、この歌の紹介文に私は「迎えが遅くなる親の申し訳なさを、子どもが軽やかにのりこえて育つがたを、ひまわりに託しました」と書いています。ヒマワリの原産地は北米で日本へは十七世紀にやって来たそうですから、紀貫之や在原業平は知らなかつたはずですが、夏の季語になっているくらいですから風物詩の一つとしてすっかり日本に定着しています。仮名序に紀貫之

が「心に、思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出だせるなり」と言うように、私も夏の盛りにつきくと潔く立つヒマワリに、保育園でたくましく生きる子どもを重ね、親を励ましたかったのだと思います。お母さんが来ない寂しさからでしょうか、「手伝うわ、せんせい」と言う子どもの気持ちを手伝う保育者の在りようも、やはり私は伝えたいと思えました。このように自然を内に取り込み文化にして楽しみ、それを伝える。何と豊かな営みなのだろうと、改めて、人の心を種とするよろづの言の葉にことばに感謝したくなりました。

「猛き武士の心をも慰むるは歌なり」。私には、戦に敗れ路傍に斃れた男の悲しみを、皓々と照らす月が洗い流す光景が目には浮かびます。男の口には、望郷の念にふさわしい月の歌が上ったかもしれませぬ。ひとまずは筆をおき、類歌を古今和歌集に求めることにしましょう。

参考文献

日本古典文学全集7『古今和歌集』小学館 一九七一年